2022 年度小委員会活動成果報告

（2023 年 1 月 19 日作成）

小委員会名	人類学的アプローチ小委員会	**主 査 名**：**大野隆造** **就任年月**：2019 年　4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学委員会 （環境心理生理運営委員会）	**委員長名**：秋元孝之 **主 査 名**：宗方　淳
設　置　期　間	2019 年　4 月　　～2023 年　3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	人間と環境との関係を総合的に扱う環境心理生理研究を支える基本的理論・方法として、これまでに積み重ねられてきた人類学の観点および方法を吟味し、それに基づいて人間に好ましい環境の構築のための新たな研究の道筋を探る。 ・初年度 １） 人類学的研究状況の把握 ２） 構築環境に関わる人類学的研究の理論と思考の整理および事例の収集（文献調査、招待講演） ・２年度～３年度： 初年度活動の継続および ３） 交流活動の推進(公開研究会・見学会等) ・４年度： ４）成果の整理、総括	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：無 主査：大野隆造　（東京工業大学） 幹事：諫川輝之　（東京都市大学） 委員：栗原伸治（日本大学）、村松陸雄（武蔵野大学）槙 究（実践女子大学）、隼田尚彦（北海道情報大学）、斎尾直子（東京工業大学）、小林美紀（東京工業大学）、山田協太（筑波大学芸術系）、佐野奈緒子（東京電機大学）、稲上 誠（名古屋大学）、関 博紀（東京都市大学）、吉澤 望（東京理科大学）、川井敬二（熊本大学）	
設置 WG （WG 名：目的）	**・自然・生態 WG**：人類の進化、生態など生物学的な側面で人類共通の特性を扱う研究の理論的枠組みと人類学的思考の整理、および研究事例の収集を行う。 **・文化・社会 WG**：世界の民族の異なる言語、習慣など文化・社会的な側面で人類の多様な特性を扱う研究の理論的枠組みと人類学的思考の整理、および研究事例の収集を行う。	
2022 年度予算	166,000 円	**ホームページ公開の有無**：無 **委員会 HP アドレス**：

項　　目	自己評価
委員会開催数	4 回（いずれもオンライン開催。年度内計画 3／8 を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	
講習会	
催し物 （シンポジウム・セミナー等） *能力開発支援事業委員会承認企画	
大会研究集会	

対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	今年度も、昨年度と同様、新型コロナウイルスによる感染拡大を受けて、委員会および WG をオンライン開催した。初回の委員会では、新型コロナウイルスによる影響下での、各委員の教育・研究に対する取り組みについての報告と意見交換を行った。第 2 回、第 3 回では、新型コロナウイルスによる大学キャンパス空間に対する再評価、人工知能や深層学習と認知心理学との関わりの変化、イスラム建築の幾何学的な読み解き、枯山水庭園の魅力の科学的解明、など各委員から研究の新たな取り組みを題材として議論した。そして第 4 回の委員会は委員以外の参加を求める拡大委員会として、これまでの議論内容を紹介し広く意見を求める予定である。 以上のように、本年度も新型コロナウイルスによって変則的な活動となったが、後半は本来議論すべき「人類学的アプローチ」の可能性について、各委員の具体的な課題に対する意見交換を通して、委員間でその認識を共有し、拡大委員会において、その認識を広めることを試みたい。
委員会活動の問題点・課題	今年度も新型コロナウイルスによって、当初考えていた公開研究会・見学会等が行えなかった。今後はこれまでに整理された人類学的な考え方の適用や研究の可能性について広く議論する機会を持つ必要がある。

＊　小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。
＊　中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学委員会用　自己評価欄

2022 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	B
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	「目標の達成度」に記したように、今年度も、昨年度と同様、新型コロナウイルスによる感染拡大を受けて、4回の委員会を２WG合同でオンライン開催した。 初回の委員会では、新型コロナウイルスによる影響下での、各委員の教育・研究に対する取り組みについての報告と意見交換を行った。第 2 回、第 3 回では、各委員から研究の新たな取り組みを題材として議論した。そして第４回の委員会は委員以外の参加を求める拡大委員会として、これまでの議論内容の一端を紹介し広く意見を求める予定である。 以上のように、本年度も新型コロナウイルスによって変則的な活動となったが、後半は本来議論すべき「人類学的アプローチ」の可能性について、各委員の具体的な課題に対する意見交換を通して、委員間でその認識を共有できた。ただし、その認識を広く学会員に伝えるべく計画した公開研究会が実現できず、拡大委員会として不充分なかたちでしか成果が公表できないことから、総合評価はBと判断した。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。